

第55回 「和製ブルース」の出現

淡谷のり子の魂が込められた

昭和12年、前年にコロムビア・レコードに入社した服部良一は横浜・本牧のバーで淡谷のり子の歌う『暗い日曜日』（原曲は、ダミアが歌ったシャンソン）が流れているのを耳にし、本牧を舞台にした和製ブルースを創作して、淡谷に歌わせようと決意します。

まだ無名だった藤浦洗に作詞を依頼、服部からそれなりの取材費を渡された藤浦はさっそく本牧を訪れ、翌朝、一夜を共にした女性が発した「窓を開ければ、港が見えるのよ」という平凡な言葉を冒頭の歌詞に生かし、「本牧ブルース」を完成させます。

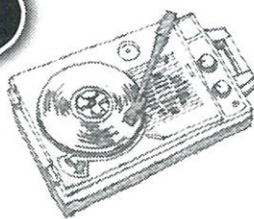
すでに日中戦争が実質的に始まっていた頃で、当時の本牧界限といえ、外国人相手の私娼がたむろするいかげわしい場所とされていたうえ、歌詞が時勢に合わないことも心配され、題名は自主的に『別れのブルース』に変更されます。少し前に『別れのタンゴ』（曲・平川英夫）の発売が許可されていたので、「別れ」なら

大丈夫だろう、という思惑もあったことでしょう。戦前の歌謡界において、すでに「ブルース」のつく曲は登

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



場していましたが、日本中に「ブルース」という言葉と歌のジャンルを浸透させたのは、この『別れのブルース』の大ヒットによるものでした。『別れのブルース』につづく『雨のブルース』のヒットによって、淡谷は「ブルースの女王」と称されるようになり、服部が求めていたことと見ると、服部が求めていたこととは、ルーツである黒人ブルース音楽を踏襲することより、その精神と歌唱法を日本に持ち込むことだったのではないかと思われま

す。『別れの〜』はいわゆるヨナ抜き短調の歌謡曲と民謡を融合させた、従来から聞かれる旋律に、4ビートのリズムが刻むという構成になっていて、間奏のサクソフォーン演奏以外、黒人ブルースを思わせる箇所もなく、楽曲自体は「タンゴに乗せた演歌」といった印象です。ただし、そこに音域を下げてダミアのように歌う淡谷の歌唱が入ると、魂が込められたかのように和製ブルースの歌謡曲が出現するのです。

歌謡を大切にしている淡谷のことで、おそろしく「別れ」の意味を自身の半生に重ね、お気に入り『セントルイス・ブルース』を意識しつつも、和製シャンソンとして歌っていたのではないかと想像します。淡谷の功績は、服部良一とともに「ブルース歌謡」を歌謡界に根付かせただけでなく、ディック・ミネを世に出し、越路吹雪に芸能人たるべき姿を示し、芦野宏などにシャンソンの世界を教え、シャンソンの魅力を広めるために終生尽力したことにもあります。

美川憲一も、シャンソンとその生き方を淡谷から学んだ一人でした。美川が『柳ヶ瀬ブルース』をヒットさせたことから、その低音の美声に興味を持った淡谷と「ブルース」つながりで親しくなり、シャンソンの世界へと導いたのも淡谷でした。